

## 南太平洋海域研究センターから多島圏研究センターへ

井上晃男（南海研センター長）

昭和56年4月、鹿児島大学の南方地域に関する幅広い学問分野の研究実績をもとに、これをさらに発展させ、かつ、より総合化、学際化するため、オセアニアおよびその周辺地域を調査研究の対象とする、学内共同教育研究施設「南方海域研究センター」が新設された。さらに、これを基礎にして昭和63年4月に設立された現在の「南太平洋海域研究センター」は、時限到来に伴って平成10年3月末をもって廃止され、4月からは「多島圏研究センター」に生まれ変わる予定である。これまでの南太平洋海域研究センターの成果や活動状況については既に本誌で紹介したので割愛することとし、ここでは新センターの目的や研究課題などについて述べる。

新センターはこれまでの研究成果を基礎に、太平洋とその周辺部の東南アジア島嶼域を対象にして、島々とそれをとりまく海洋が構築する空間である多島圏について総合的に調査・研究しようとする施設である。多島圏における最小単位である島嶼は、隔海性、狭小性、半閉鎖性という特徴をもち、さらにいくつかの島嶼が集まって、人・もの・情報が行き交い、島嶼相互が影響し合う多島域を構成する。この多島域は、個別的な特徴をもち、別の多島域と関連しながら多島圏をつくる。このように新センターが対象とする空間は、島嶼、多島域、多島圏という三つの位相をもつものと考えられる。

多島圏全体の自然は、圏外の発展途上国の産業活動の影響によって、急速に破壊されつつあ

る。地球全体の環境の保全は、地球上のどの地域に住む人間にも関わる共通の問題である。産業の育成と環境の保全はある意味では相矛盾する要素をもっているが、この二つを両立させなければ、多島圏の将来はありえない。この目的のために、多島域環境研究領域を設定した。一方、産業の発達とそれともなう社会の近代化は人々の生活の変動をもたらすため、これにどのように対応するかを研究することも大切である。さらに公衆衛生や人口動態などを扱い、文化の本質を追究し、経済の活性化などについてもあわせて研究する必要がある。これらの目的のために多島域社会動態研究領域を設定した。このように新センターは2研究領域からなる。以下にそれぞれの研究領域の研究課題とその研究内容を示す。

### 多島域環境研究領域

第1課題：多島域における人間と自然の相互作用の研究

### この号の内容

巻頭言「南太平洋海域研究センターから多島圏研究センターへ」…	1
定例研究会（第100回）……………	3
海外出張雑感……………	4
海外出張・研修の記録……………	7
最近の出版物……………	10
センターの動向……………	11

典型的な複数の多島域を選び、域内のいくつかの島嶼において、農業、漁業などの生業活動の方式や労働量、居住様式などについて、人間の自然に対する働きかけや適応の仕方を研究する。このような島嶼のデータを基礎に、人間と自然両面における域内の島嶼間の関連機構を解明し、多島域全般の人間と自然の相互作用の特徴を浮き彫りにする。

第2課題：多島域における気候、地形、生物伝播などの自然地理学的研究

多数の島嶼ならびに多島域について、自然地理的要素、たとえば、位置、面積、成因、地形、気候、土壌、海流、生物相などのデータを集積、整理し、島嶼および多島域をいくつかの典型的なタイプに類型化する。さらに、島嶼における生物固有種が上述のタイプとどのように関連しているかを解明し、他方、共通の生物種についてはその伝播様式の理論を構築する。

#### 多島域社会動態研究領域

第1課題：多島域における社会・文化変容と自然環境との関わりの研究

西欧文明との接触以来、大量生産・消費を特徴とする近代的な経済システムが浸透することによって、伝統的な社会様式が一般的であった南太平洋の島嶼世界は、自然生態および文化・社会制度の急激な変容を経験した。本課題は、口承・書承両様の資料の分析により、島嶼社会の文化慣習を解明し、あわせて、多島域の自然・社会環境の変動に対する島嶼社会の適応の過程を総合的に研究する。

第2課題：多島域の居住環境、栄養状況などの社会医学的環境の研究

島嶼内においては、都市または利便性の高い海岸部に人口集中が起り、居住環境の悪化をもたらす傾向にある。このような急激な人口変動に対応した居住環境、栄養状況、医療環境、生活様式の変化について研究する。同時に、このような変化にともなう医療、予防の仕組み、医療機構のあり方について研究する。

第3課題：国際政治・経済環境における島嶼国

#### 家の役割の研究

南太平洋では、現在、多くの島嶼国家が独立を達成し、この地域を舞台とした国際政治の担い手となっている。本課題は、流動的かつ国際的な政治・経済環境下における島嶼国家と多島圏外諸国家との関係を研究する。さらに、国際的な政治・経済動向に対する島嶼国家機構の役割を考究する。外国人客員が担当する。

鹿児島大学が位置する鹿児島県は亜熱帯圏の一部に属し、その自然条件は熱帯のそれに類似している。また鹿児島県は多くの島々を抱え、たとえば南西諸島には有人・無人の島が連なっている。大きな陸地から離れた島という地理的条件に由来する県および住民の悩みは、オセアニアの多島圏と共通である。本研究センターが目指す研究は、多島圏の人々が満足できる水準の生活を維持するための方策を提示することを最終的な目標とする。したがって、センターの成果は鹿児島県とくにその離島域には有益なものとなるであろう。県内諸機関との有機的な連携の下で、より高い成果を目指したい。

これまでの2つのセンターが成果を挙げ得たのは、専任教員、学内兼務教員および国内外協力研究者の緊密な協調によるところが大きい。新センターにおいても、これまでとほぼ同じ体制で調査・研究を実施する考えである。一層のご協力をお願いする。

以下にごく簡単に多島圏研究センターの骨子を示す。

1. 南太平洋海域研究センターを廃止し、多島圏研究センター（Research Center for the Pacific Islands）を新設する。
2. ここでいう多島圏とは、外洋に位置する島々とそれを取りまく海洋が構築する空間である。この空間は、さらにいくつかの個別的な特徴をもつ島嶼の集合である多島域から構成される。多島域は、人・もの・情報が行き交い、島嶼相互が影響を及ぼし合いながら存在する空間である。多島圏における最小単位である島嶼は、

- 隔海性、狭小性、半閉鎖性という特徴をもつ。このように、新センターが対象とする空間は、多島圏 (Island Sphere)、多島域 (Island Groups)、島嶼 (Islands) という三つの位相をもつ。
3. これらの三つの位相の中で、多島域は、多島圏全体を理解するための研究の基本対象であるという意味においても、また、島嶼が生き延びていくための根幹となる地域単位であるという意味においても、きわめて重要である。
  4. 新センターは、アジア太平洋の熱帯・亜熱帯の多島域を対象として、「多島域の生態と動態」という主題のもとに、自然・人間・文明環境にかかわる種々の問題を統合的に研究する。このようにして初めて、アジア太平洋の多島圏に固有の自然、文化、社会にかかわる諸問題の理解が可能となる。
  5. 新センターは、総合的な判断力と、深い人間性の養成を目的とする教育をおこなう。すなわち、学生、大学院生、留学生および社会人などに対して、研究の成果を素材とする教育をおこない、多島圏に固有の問題を普遍的な視点で考察する能力を育成する。
  6. 新センターは、現在の南太平洋海域研究センターの定員4と外国人客員1によって設立される。
  7. 新センターの2研究領域は、それぞれ以下のような研究課題によって構成される。
    - 多島域環境研究領域
      - 研究課題1：多島域における人間と自然の相互作用の研究
      - 研究課題2：多島域における気候、地形、生物伝播などの自然地理学的研究
    - 多島域社会動態研究領域
      - 研究課題1：多島域における社会・文化変容と自然環境との関わり研究
      - 研究課題2：多島域の居住環境、栄養状況などの社会医学的環境の研究
      - 研究課題3：国際政治・経済環境における島嶼国家の役割の研究
  8. 新センターは、鹿児島大学の学内共同教育研究施設とし、専任教官、外国人客員教官、協力研究者らが協力して教育・研究にあたる。
  9. 新センターは、多島域をもつ鹿児島県以南の地域性を考慮して、県内の諸機関との密接な協力のもとにアジア太平洋多島圏との積極的な国際交流を促進する。

## 南太平洋海域研究センター研究会発表要旨

第100回

1997年10月27日

### アフリカイネ (*Oryza glaberrima* Steud.) の特徴

片山忠夫 (鹿児島大学農学部)

アフリカイネ (*Oryza glaberrima* Steud.) はアジアイネ (*Oryza sativa* L.) とともにイネ属約25種の中で2種のみが栽培種である。両者間での交雑は容易で、染色体対合は正常に近

く、共通のAAゲノムによって構成されている。しかし両者はそれぞれ他の野生2種と、Intrafertile groupを構成し、互にIntersterile groupの関係により、その子孫は極めて得難い。

アフリカイネはBC 2,000年頃 Niger 河上流で *O. breviligulata* から栽培化され、その後、Senegal, Gambia, Guinea Coast と次第に分布範囲を拡げ、東アフリカに迄分布した。現在は西アフリカが主な栽培地域であるが、東アフリ

カでも栽培されており、それぞれの土地で、栽培、半栽培、野生の状態で見られる。*O. sativa*, *O. longistaminata*, *O. breviligulata* と同所性及び異所性を示すが、それには種々の生態的条件が関与している。

この種は形態的、生理的及び生態的形質に *O. sativa* と異った、多分に野生種と同質のものがみられ、栽培史の違いに據るところが多い

と考えられる。これらの形質は、雨期・乾期に関係して自然及び人為環境下で必要な要件と読み取れる。また、様々な障害に対する耐性、光合成能力、嗜好などに係わる多様性、農業的、生態的及び社会的背景から、今後も重要な作物であり続ける。

---

## 海外出張雑感

---

### なぜ国際協力か

川村軍蔵 (水産学部)

既に新聞等で報道されているように、マレーシア・プトラ大学 (前マレーシア農科大学) を対象にした JICA プロジェクトが今年 5 月から開始される。これは日本の ODA の一環として行なうもので、マラッカ海洋の水産資源と環境を調査研究するプロジェクトである。その事前調査の目的で私と野呂忠秀助教授 (水産学部) は昨年 2 度にわたって同大学を訪問し、プロジェクト開始後は鹿児島大学水産学部が国内支援の拠点をつとめることになっている。前マレーシア農科大学では過去に、海洋水産学部拡充計画という JICA プロジェクトが実施され、筆者はこれに事前調査から終了まで現地要員および支援委員として関わった。この他にもフィリピンとコロンビアへは JICA 派遣専門家として、マレーシアとインドネシアには JSPS 派遣研究者として現地で与えられた業務を行ってきた。筆者がこのように海外出張することによって水産学部学生の指導が不十分になり、講座の学生たちから不満が出ている。しかし、学生指導も国際協力も私の義務であると考えているので、国際協力を止めるわけにはいかない。

では、なぜ国際協力が義務なのか。筆者はその根拠を「ユネスコ (国際連合教育科学文化機構) 憲章」と「ユネスコ国際 (理解) 教育勧告」

にしている。したがって、国際協力は国連参加国の国民全員の義務であり、国税を使って事業を行うのは当然である。最近では地方自治体と NGO による国際交流や国際協力も活発に行われていて、国民総参加型の様子を呈している。しかし、なぜか税金を使用した場合に限って国際交流と国際協力による直接的な見返りが議論されるが、見返りは「国際平和」であることがなかなか説明されないのが残念である。

マレーシアも国家事業としての国際協力だけでなく州政府や NGO による国際協力が活発である。マレーシアは多民族国家であるので、国民が自国だけでなく他国の内部の多様性について深い認識をもっており、国際協力にはそれが反映されているように思われる。他方、わが国では「多様性の存在」が忘れられがちで、自分に価値あるものは相手方にとっても価値があるという考えに基づいた交流・協力が多々あって、マレーシアの国際交流・協力から学ぶべきところが多い。

当センターの研究活動が海外に視点や拠点を置くものが多い。このような活動が単に研究者個人の興味からのみで行われるのではなく、現地への影響を充分配慮したものであってほしい。共同研究という名のもとに行われる相手側の便宜供与が強制的であってはならないし、印刷公表されるものが日本側研究者にとっては研究成果であるが相手側にとって価値のないものであってはならない。我々が行う現地調査が、現地側

では国際交流であり国際協力であると考えられている可能性は充分あるのだから。

既に周知のものではあるが、参考までに以下に「ユネスコ（国際連合教育科学文化機構）憲章」と「ユネスコ国際（理解）教育勧告」の日本語訳の抜粋を示した。

◆ユネスコ憲章 1945年

この憲章の当事国政府は、その国民に代わって次のとおり宣言する。

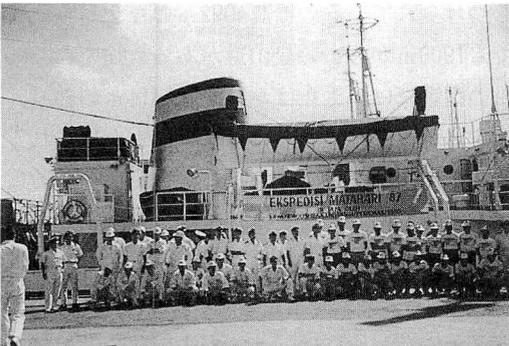
戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。

相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸民族の間に疑惑と不信をおこした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった。

ここに終わりを告げた恐るべき戦争は、人間の尊厳・平等・相互の尊重という……

……すべての国民が相互の援助及び相互の関心の精神をもって果たさなければならない神聖な義務である。……

その結果、当事国は、世界の諸人民の教育、科学及び文化上の関係を通じて、国際連合の設立の目的であり、且つ、その憲章が宣言している国際平和と人類の共通の福祉という目的を促進するために、ここに国際連合教育科学文化機構を設立する。



前JICAプロジェクトの支援に寄港し、マレーシア側と共同調査した水産学部附属練習船かごしま丸

◆ユネスコ国際（理解）教育勧告 1974年

国際理解、国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告

国際理解、国際協力及び国際平和並びに人権及び基本的人権の尊重を増進するために……、ジュネーブ諸条約に掲げられた諸目的を教育を通じて達成することが国々に課せられた責務であることを留意し、……

更に、宣言された理想および表明された意図と現実との間にはなお広い不一致が往々にして存在することに注目し、……この勧告を採択する。

クック諸島ラロトンガ島の自然地理

森脇 広（法文学部）

1996年・97年の7月・8月に、民族・考古・人類学調査プロジェクトに加わって、クック諸島ラロトンガ島の自然地理学的調査を行う機会を得た。ラロトンガ島はほぼ西経160度・南緯20度にあり、赤道を挟んでちょうどハワイと反対側に位置する。リゾートホテルがいくつかあり、西方のフィジーや東方のタヒチなどのように観光地をめざしているが、日本からの直航便がないこともあって、日本の観光客は極めて少ない。日本からラロトンガ島に行くにはニュージーランドのオークランドやハワイなどを経由しなければならない。私が滞在していたときは、ニュージーランドからの年輩の観光客をよく見かけた。かつてデング熱がはやったことがあるが、特に注意すべき病気もなく、快適な島である。

ラロトンガ島は第三紀の玄武岩からなる周囲30kmの楕円形の島で、開析が進んでいるが、カルデラと中央火口丘が中北部に残存しているのを認めることができる。標高653mの最高峰テマングはカルデラ縁の東側の一角にある。この島の70パーセントはこの死火山を中心とする山岳地帯で、内陸には目立った平地はなく、集落

はカルデラ内の谷底の土石流段丘上にわずかに立地するだけである。

標高20m以下の海岸沿いには最大幅1kmの海岸低地とさらにこの外側に最大幅1kmのサンゴ礁(裾礁)が取り巻く。この海岸低地にクック諸島の人口の半分(約1万人)が住んでいる。海岸低地での土地利用はこれを形作る微地形によく対応している。山岳から低地にでる谷口周辺には比較的急な勾配を持つ扇状地ができている。ここは透水性のいい砂利でできており、河川水は伏流するため、ココナッツやオレンジ・パパイヤなどの畑となっている。扇状地の海岸側の扇端部は伏流水が湧きでる地帯となる。ここは、昔の海浜で砂や礫が打ち上げられて作られた砂堤によって閉鎖されているため、後背湿地が形成され、タロイモ畑となっている。標高4mにも及ぶ高い砂礫堤の内陸側は特に水はけが悪く、広い湿地が分布する。タロイモはこのほかに砂堤と砂堤の間の湿地(堤間湿地)が主要な栽培場所となっている。住居の多くは砂堤からなる微高地や低い更新世の台地上に立地している。

人類の初期居住などに関わって、約6000年前以降の海岸低地の陸化の過程は興味深い。筆者らの調査では、6000-5000年前ごろは、後氷期の海面上昇により海岸線は現在の河谷の谷口まで後退し、現在の海岸低地のある場所は陸化していなかったことがわかった。砂堤の形成と扇状地の拡大が見られるのが、4000年前以降である。5000-4000年前ごろは海面は現在より相対的に1mほど高かった。こうした海岸低地の形成と人類の痕跡との関係の調査はまだ十分ではない。7、8月は日本の春のような陽気で、実に快適であった。

## インドネシアとマレーシアを旅して

鈴木英治(理学部)

今年度もインドネシアの中央カリマンタンへ7月16日~9月1日、ジャワ島の山地林へ10月

13日~11月28日、マレーシアに年明けの1月5日~15日に行ってきた。インドネシアには、1982年のクラカタウの調査以来15回目だったが、マレーシアは初めて訪問した。同じマレー語系の言葉が通じ、同じような民族が生活している隣国であり、似たところもたくさんあったが、なぜこんなに違うのだろうか戸惑う所もあった。マレーシアと言ってもボルネオのサバ州に行ったのだが、町並みを見てまず違うのは看板に漢字が多いことである。インドネシアにも中国系の商人がたくさんいるが、漢字の看板を掲げることは法律で禁止されているので、漢字の表示をみることはまずない。インドネシア語と、マレーシア語も元は同じ言葉であったのだが、独立以来別々に国語を整備しているので、バスがbisとbasと表示されるなど、時々違って戸惑うことがあった。階の表示もマレーシアはイギリス式で1階がgroundで、2階から1、2、3階となるのも、なれないとおかしな感じだ。

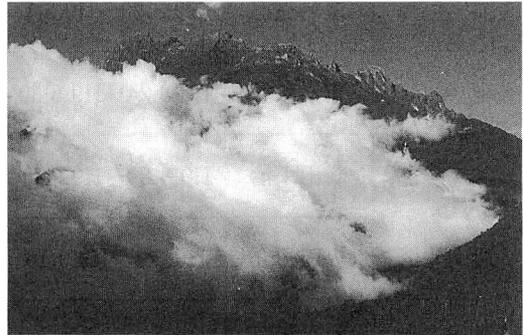
今回一番の違いに驚いたのは、国立公園の整備状況であった。低地熱帯多雨林が見られるダナムバレーに4泊、東南アジア最高峰のキナバル山(写真)を擁すキナバル国立公園に3泊しただけなので一般化するのは危険かもしれないが、同じボルネオ島でありながら、サバ州の国立公園と比較できるような公園は、インドネシア領のカリマンタンにはないといってもよいだろう。3食ついて2500円ほどかかったが、宿舎はきれいだし、自然観察のトレールもしっかりしつけられている。標高4092mのキナバル山までも1900mからよい登山道がある。途中の3300mの宿舎には、毛布ばかりか暖房付きの部屋、食堂、シャワー、さらには海外にもかけられる公衆電話まであった。キナバル登山は一昔前には大変なものであったようだが、富士山の夏山登山と変わらないものになっていた。これを進歩と考える人と、墮落と考える人がいるだろうが。

ダナムバレーには、とてもよい熱帯低地林が保存されており、野生の象までいるのだが、トレールはしっかりしているし、マネージャーと

話すと、よいステーションを作りだそうとする熱意が伝わってきた。

インドネシアのジャワ島の山地林のハリムン山国立公園にも JICA の援助で立派な宿舎ができています。11月にはそこに1ヶ月ほど滞在して調査したが、建物の土台が崩れても、管理責任のある PHPA の職員は直す気配もないし、自炊のためのプロパンガスがなくなったらそのまま1週間、山用の石油コンロでしのぐ羽目になった。仕事なので仕方なく宿舎の管理をしているが、改善しようという意欲が感じられない。親方日の丸でなくて、インドネシアでは親方メラ

プティ（インドネシア国旗は半分が赤メラ、半分が白プティ）と言うのかどうかは知らないが、与えられた職務以外はやらない公務員が多い。月給が余りにも安いかもしれないが。



キナバル山

## 南太平洋海域研究センター専任・兼務教官の 海外出張及び研修記録

(1997年8月～1997年12月)

所 属	氏 名	期 間	国 名	用 務
水産学部	川村軍蔵	H9.8.1～H9.8.19	マレーシア	マレーシア・マラッカ海峡水産資源・環境研究事前調査
法文学部	森脇 広	H9.8.4～H9.8.23	ニュージーランド・クック諸島	学術調査
法文学部	黒田景子	H9.8.4～H9.9.11	タイ・マレーシア	文部省科学研究費に基づく現地文献と口承資料収集調査
水産学部	松田恵明	H9.8.7～H9.8.16	インドネシア	国際学術研究調査
水産学部	市川英雄	H9.8.7～H9.8.21	インドネシア	国際学術研究調査
水産学部	山尾政博	H9.8.7～H9.8.21	インドネシア	国際学術研究調査
理 学 部	山根正気	H9.8.8～H9.8.27	マレーシア	アリ類の標本調査と生態調査
水産学部	門脇秀策	H9.8.11～H9.8.19	ノルウェー	AQUANOR'97参加および欧州養殖技術調査
水産学部	野呂忠秀	H9.8.13～H9.8.29	マレーシア	マレーシア・マラッカ海峡水産資源・環境研究事前調査
工 学 部	土田充義	H9.8.15～H9.8.26	中華人民共和国	湖南省鳳凰県の苗族の民家調査

## (8) 南海研だより No.34

所 属	氏 名	期 間	国 名	用 務
法文学部	桑原季雄	H9.8.20~H9.9.7	マレーシア	文部省科学研究費補助金（国際 学術調査）による現地調査
農 学 部	濱名克己	H9.8.23~H9.9.1	オーストラリア	第10回アジア獣医学会出席・発表と クイーンズランド大学での研究交流
理 学 部	市川敏弘	H9.8.24~H9.8.30	マレーシア	海洋科学に関する国際会議出席 および資料収集
法文学部	新田栄治	H9.8.29~H9.9.11	マレーシア・シン ガポール	「東南アジアの伝統」の変容と 創生の現地調査
農 学 部	坂田祐介	H9.9.4~H9.9.16	アメリカ合衆国	ジョージア州立大学との学術交 流
農 学 部	濱名克己	H9.9.4~H9.9.16	アメリカ合衆国	ジョージア州立大学との学術交 流
理 学 部	根建心具	H9.9.5~H9.9.15	ロシア連邦	「極東ロシア沿岸地域における鉱物資源の賦存状況に関 する研究」のための現地調査および研究打ち合わせ
理 学 部	山根正気	H9.9.15~H9.9.24	中華人民共和国	昆虫類の調査
理 学 部	佐藤正典	H9.9.19~H9.10.5	ドイツ・デンマー ク	国際シンポジウムおよび研究打 ち合わせ
水産学部	市川 洋	H9.9.21~H9.9.25	中華民国（台湾）	東シナ海の海況予報モデルの研究 打ち合わせ
法文学部	西村 知	H9.9.25~H9.10.8	フィリピン	資料収集
法文学部	新田栄治	H9.9.26~H9.10.2	タイ	メコン川流域の文明化に関する 考古学的研究の現地調査
法文学部	渡辺芳郎	H9.9.26~H9.10.2	タイ	メコン川流域の文明化に関する 考古学的研究の現地調査
理 学 部	根建心具	H9.10.2~H9.10.23	ロシア連邦	「極東ロシア沿岸地域における鉱物資源の賦存状況に関 する研究」のための現地調査および研究打ち合わせ
南 海 研	青山 亨	H9.10.4~H9.10.19	インドネシア	ジャワ海域に関する文献調査、 現地調査および研究打ち合わせ
法文学部	新田栄治	H9.10.12~H9.10.27	インドネシア	インドネシアにおける考古学と 遺跡の現地調査
理 学 部	鈴木英治	H9.10.13~H9.11.28	インドネシア	インドネシア生物多様性保全計画に 関する植物生態学からの研究指導
水産学部	内山正樹	H9.10.24~H9.12.10	インドネシア	海洋観測および航海実習他
水産学部	吉永圭輔	H9.10.24~H9.12.10	インドネシア	海洋観測および航海実習他
農 学 部	石黒悦爾	H9.10.25~H9.11.6	アメリカ合衆国	ASA（米国農業学会）出席・発 表ならびに研究打ち合わせ

所 属	氏 名	期 間	国 名	用 務
工 学 部	北村良介	H9.10.28~H9.10.31	中華人民共和国	「地盤・岩盤工学における理論と実際の最近の動向」に関する日中ジョイント・シンポジウム出席
連合大院	小澤貴和	H9.11.3~H9.11.9	仏領ニューカレドニア	第5回インド・太平洋魚類会議出席
法文学部	新田栄治	H9.11.7~H9.11.13	タイ	タイにおける考古学の調査研究
農 学 部	衛藤威臣	H9.11.7~H9.11.24	オーストラリア	国際食用ネギ類シンポジウム出席および研究所訪問
理 学 部	山根正気	H9.11.13~H9.11.23	中華民国(台湾)	アジア太平洋昆虫学会会議出席
法文学部	渡辺芳郎	H9.11.17~H9.12.2	中華人民共和国	長江流域における城郭都市形成過程の考古学的調査
農 学 部	遠城道雄	H9.11.19~H9.11.29	オーストラリア	北部オーストラリアにおける熱帯有用植物の栽培状況調査
法文学部	黒田景子	H9.11.21~H9.11.24	大韓民国	日本マレーシア研究会ソウル大会参加および釜山外国語大学の研究者との研究情報交換
法文学部	桑原季雄	H9.11.21~H9.11.24	大韓民国	日本マレーシア研究会ソウル大会参加, 大学訪問および資料収集
農 学 部	中西良孝	H9.11.23~H9.11.27	大韓民国	韓国済州島における資源リサイクルシステム調査
農 学 部	萬田正治	H9.11.23~H9.11.27	大韓民国	韓国済州島における資源リサイクルシステム調査
水産学部	野呂忠秀	H9.11.26~H9.12.2	マレーシア	マレーシア・マラッカ海峡水産資源・環境計画実施協議調査
水産学部	門脇秀策	H9.12.10~H10.10.9	ノルウェー・ドイツ	海面・陸上養殖の生産生態学的研究(特に漁場管理保全に関する研究)
水産学部	松岡達郎	H9.12.13~H9.12.20	パプアニューギニア	パプアニューギニア第三国集団研修評価団長
水産学部	山尾政博	H9.12.16~H9.12.26	インドネシア	国際学術研究調査
法文学部	新田栄治	H9.12.16~H10.1.6	ヴェトナム	メコン川流域における文明化に関する考古学的研究
理 学 部	山根正気	H9.12.18~H10.1.11	タイ・マレーシア	アリ類の分布・生態調査
工 学 部	櫻井仁人	H9.12.19~H9.12.29	マレーシア	共同研究(沿岸流と水温変動の観測研究)実施のため

## 南海研センターの出版物

### 南太平洋研究18巻1号 (1997)

肥後伸夫：松材漁礁に関する研究 I—初期の集魚効果について

Motoo KITANO, Charles E. LEHNER, Yasushi TAYA, Hiroki S. OZAKI, Masami TAKENAKA and Mahito KAWASHIMA: Histopathological Study on Dysbaric Osteonecrosis (DON) in Tibiae of Sheep with a Hyperbaric Exposure

Lamont LINDSTROM: Cultural Tourism in the Pacific

### 南太平洋研究18巻2号 (1998)

Muhammad ASHFAQ, Nisar AHMAD, and Amjad ALI: Effects of Optimum Dosages of Nitrogen, Potassium, Calcium and Copper on Silkworm, *Bombyx mori* L. Development and Silk Yield

Hideharu KUNIYOSHI, Motoo KITANO, Yasuto UCHIO, Taulealeausumai Eti ENOSA, Leitua Faalii ALOAINA, Vaasilifiti Faleniu ASAUA and Shin-ichi TERASHI: Seroepidemiological Survey of Anti-Human T-cell Leukemia Virus-Type I Antibodies in Western Samoa  
T. K. JAYARAMAN: Private Investment in Fiji: 1977-1994 Did Government Investment Have Any Crowding-out Effect?

### Occasional Papers No. 31 (1998)

南太平洋への誘い—鹿児島大学南太平洋海域

研究センター公開講座講義録1994-1997年 (青山亨, 塚原潤三・編)

1994年から97年までに本研究センターが開催した公開講座のなかから興味深い講義録を収録した。講演の年次にはよらず、前半は地域編、後半は自然、技術と産業、社会の3分野からなる主題編として、内容によって再構成している。

#### 1. 地域編

中野和敬：ソロモン諸島

松岡達郎：パプアニューギニア

北野元生：サモア

井上晃男：仏領ポリネシア

桑原季雄：マレーシア

#### 2. 主題編

(自然)

根建心具：太平洋の土台と変動

櫻井仁人：太平洋の深層の流れ

市川 洋：黒潮と気候変動

北村良介：火山のめぐみと災い

佐藤正典：生命あふれる干潟のめぐみ

井上晃男：魚や貝の毒

(技術と産業)

西村 知：フィリピンの稲作農民

野呂忠秀：フィリピンの漁師がつくる日本の夏のお中元

土田充義：古今東西の土間と板敷の生活

衛藤威臣：遺伝子組み換え食品

(社会)

ロン・クロコム：アジアと南太平洋

青山 亨：インターネットでつなぐ南太平洋

## センターの動向

### 平成9年度外国人研究員の帰国

平成9年度外国人客員研究員として1997年9月3日から本センターに滞在していたウィーン大学古生物学研究所の Johann Hohenegger (ヨハン・ホーヘンエッガー) 教授は3月14日に帰国しました。

### 『南太平洋研究』18巻1号の電子データベース化実験の結果

鹿児島大学附属図書館が文部省学術情報センターなどと共同でおこなっている科研課題『研究成果流通環境に関する総合的研究』に基づく全部電子データベース化実験の対象として『南太平洋研究』18巻1号が選ばれました。現在、第1段階として、18巻1号のPDF (Portable Document Format) 化が完了し、南海研のホームページにおいて掲示しています。これにより、18巻1号を、印刷したものと変わらない状態でインターネットで閲覧することが可能となりました。第2段階として、SGML 文書化し、検索エンジンによる全文検索を可能とすることが予定されています。

### 郵便番号とFAX番号の変更

南太平洋海域研究センターの郵便番号とFAX番号が以下のように変更になりました。

郵便番号

旧：890

新：890-8580

FAX番号

旧：(099) 256-9358

新：(099) 285-6197, 学内FAX：7397

### ホームページの変更

南太平洋海域研究センターから多島圏研究センターへ組織が改まるのをうけて、近くホームページの内容およびURL (アドレス) が変更されます。新しいURLは、現在のホームページにおいて案内いたします。

---

南海研だより No. 34 平成10年3月20日発行

発行：鹿児島大学南太平洋海域研究センター

〒890-8580 鹿児島市郡元一丁目21-24 電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197

電子メール [nankai@kuasmail.kuas.kagoshima-u.ac.jp](mailto:nankai@kuasmail.kuas.kagoshima-u.ac.jp)

WWW <http://bio.sci.kagoshima-u.ac.jp/kurcsp/>